美術科 提案授業実践報告

１．学年と題材　　第２学年　「誰かのためのデザイン」～自分ごとになる表現のかたち～

２．題材について

本題材は、中学校第２学年の表現の活動、工芸分野の作品制作である。本題材では、扱う材料として、木材（桂材）を使用することとする。

工芸作品は、材料そのものの質感を楽しみ、材料が持つ性質を、生徒自身が制作中に手で味わいながら理解し、学習していくことが大切である。特に工芸作品の制作においては、材料への理解と共に、完成した作品の使い手を意識してデザインを考えることが重要である。作り手である生徒たちは、使い手のことを考えた目的や機能性（良さ）、造形性（美しさ）を考えて作品制作することが課題となる。だが、目の前の生徒たちの学習する姿を踏まえると、制作している作品が目的や機能を果たせることであったり、美しい形とすることを目指したりすると、どうしても技術的な側面に価値を置く傾向が強まることにつながっていくのである。これは、思春期にある中学２年生の生徒たちにとって、見た目に明らかに表れてくる表現の活動においては、完成に至るまでの時間も、鑑賞時においても周囲の目を気にした活動になることが主立ってしまうからである。発達段階を踏まえれば、至極当然の姿ではあるものの、美術科としては常に生徒たちの美術の学習への向き合い方を考える上で課題意識を持って向き合うべき現実的な姿である。

しかし、これまでに実践した「身近な人を見つめて」と題した他者を描いた作品の相互作品鑑賞の活動において、「この作品を描いた本人に見せたいと思うか？」と問われると、生徒たちからは「上手く描けなかったけれど相手を想って描いたことを伝えたいから見せたいと思う。」といった答えが何人もの生徒たちから返ってきた。つまり生徒たちにとって、作品の向こう側にある相手の存在によって、制作した作品に技能的側面以上の価値がそれぞれの生徒自身に生まれていたといえる。

そこで本題材は、工芸作品の制作を通して生徒たちに使い手となる相手の存在を強く意識させたいと考え、「誰かのためのデザイン」と題している。表現の活動に至る大前提として、相手を想った作品制作にすることで、使い手のことを考えたデザインが生まれ、生徒たちそれぞれの明確な目的のもとに、主題が見出されることになる。また、副題にある「自分ごと」とは、作品制作する生徒自身と、その相手との関係の中に生まれる表現を主題にすることで、美術科の活動が授業時のことだけでなく、生徒の日常から生まれる発想を生きる実感に伴う表現とすることを重要なねらいとしたいという考えから付した言葉である。これまでに実践した前述のような題材を通し、生徒たち一人ひとりにとっての「誰かのために」を設定することで、技能的側面に偏らない、唯一無二の価値を作品の中に見出させていきたいとした。相手を意識し、自分が制作する作品に必要だと思うことを能動的に見出すことで、制作の過程での振り返りにも深い意味を持たせることができると考えた。

本題材の学習で、生徒たちが自ら探究的に学習する上で特に大切なのは、今日行った活動が、自分の目標としているところに見合った成果を遂げられているかを冷静に振り返ることができる時間にある。特に第２学年以上の授業時間数は週１時間ということもあり、授業毎に活動内容やその成果を振り返り、次回の制作につなげることが特に重要になる。

生徒たちは、授業時間の振り返りを授業ワークシートへまとめ、それをもとに次の制作を充実させるべく探究的な学習を要する。作品制作には数か月という長い期間をかけて向き合うものの、常に様々な課題に向き合う生徒たちにとって、週１時間の制作という限られた時間数で向き合うには相当な工夫を

要するため、毎授業の活動や振り返りを意味あるものにするための教師側の題材設定の工夫も重要である。本題材のように「誰のために作品をつくるか」と設定することで、生徒が制作する上での主題創出にもつながるが、作品の向こうに思い浮かべる他者を意識することは、「この材料はこんなことができるから、あのデザインにしてみよう」や、「このやり方は難しそうだから方法を変えてみよう」など、探究的な学習にもつながる。生徒たちが自分自身で設定した目標のために発展的に学習し、実感を伴った振り返りが叶うことで、生徒たちが日常を生きるストーリーにつながった、“自分ごと”に落ちていく表現になっていくと考える。

３．題材の目標／評価規準

(1) 本題材の目標

・作品の使い手となる相手を意識することで、表現の明確な主題を生み出す。

・使い手を想う作品制作にすることで、相手と自分の関係ならではのデザインの価値を見出す。

(2) 本題材の評価規準

知識・技能	思考・判断・表現	主体的に学習に取り組む態度
木の性質や材料ならではの良さを理解し、様々な道具を活用しながら、意図に応じて自分の表現方法を追究し、作品制作しようとしている。	自分の身近な存在が使い手となることや、その相手に向けて制作する作品ならではの表現について考え、その美しさを捉えながら作品の構想を練っている。	使い手が作品を使うところを想像し、その目的や機能などを考えた木工作品の表現の活動に取り組もうとしている。

４．指導と評価の計画（題材）

時間	ねらい・学習活動	知・技	思	態
1	木をつかった工芸作品制作の導入・ワークシートにアイディアスケッチ	知	思	
2	桂材にアイディア下描き・制作手順の学習			
3	使用道具の学習・作品制作			
4	★“誰のためのデザイン”か、“なぜそのデザイン”かの共有・作品制作	技	思	
5	★振り返りと次回の制作を見据えた目標立てに重点を置いた作品制作			態
6	“誰のためのデザイン”か、“なぜそのデザイン”かの共有・作品制作		思	態

7	★振り返りと次回の制作を見据えた目標立てに重点を置いた作品制作	技 知	思	態
8	現段階での作品相互鑑賞・作品制作			
9	作品の仕上げ			
１０	作品相互鑑賞会			

５．本時の学習

(1) 本時（第７時）の目標

①これまでの活動を振り返りながらデザインについて考え、作品をつくる相手への意識を深める。
②友達との意見交換から、相手を想ったデザインに対する様々な考えを知り、表現の視野を広げる。

(2) 指導と評価の流れ

	主な学習活動と内容	指導上の工夫・配慮
課題設定	・自己の制作の活動をワークシートなどから振り返る。 ・“誰のためのデザインなのか？”の問いについて考える。 ・作品が“誰のためのデザイン”で、“なぜそのデザイン”なのかを隣同士で伝え合う。 ・お互いの考えや想いを知った上で意見交換	・それぞれの生徒が相手を想ってデザインしていることに触れ、その価値を考えることに重点を置くことを意識させる。 ・話し合った相手のデザインの工夫で良いと思うことがあれば、発表させる。
課題追究	・相手の考えを聞いたり、意見交換をしたりした上で、デザインを再考する場合はワークシートに記入する。 ・意見交換したことや、前時に記述したワークシートの目標を踏まえて作品制作を続ける。	・自分が選んだ相手にこそデザインできるもの必要だと思うことを改めて考えながらの制作になるように促す。 ・作品をつくる相手だけでなく、自分の想いにも目を向けた制作となるよう伝える。
省察	・本日の活動を経て、相手を意識したデザインの意味やその想いを知り、今後の自分の制作に見通しを持つ。 ・ワークシートに活動の振り返りと次回の目標を書く。	・作者の想いを知ることで、技術的な面だけでない作品の価値や、使い手を考えたデザインの価値を伝える。 ・学習班の活動を経たことで制作に変化が見られた生徒にはその内容を発表させる。

(3) 評価規準

①これまでの制作を振り返り、相手を意識したデザインについて考え、今後の見通しを持てたか。
②友達との意見交換から、デザインに対する様々な思いや考えを知り、表現の視野を広げられたか。

６．生徒の学習の実際

本題材は、前項のねらいの中であげた、生徒たちが相手意識を持つ上で予想されたのは、相手意識を持つが故に失敗を恐れることに目がいきがちになることである。本題材では、相手が快適に使えるという技能的側面に偏らせず、普段生活している何気ない場所や場面での活用にも目を向けさせていきたいと考えた。その中に、自分とその相手なりの価値を見出させ、そこから主題を生み出させたいとした。

また、日常の様々なところに着目し、その生活に息づくものを造形的に表現することの面白さが隠れていることに気づかせたいと考えた。配慮事項として、生徒たちそれぞれの多様な生活背景があることに留意し、様々な事柄をもとにしたアイディアが活用できるようにした。

７．生徒の学習の考察

本題材は、思春期にある中学生の相手意識を強く持つ時期ならではの表現のあり方として題材設定することができたと考えている。中学生は、自分の表現に対する自信のなさと、多感期であるが故に周りからの評価が気になり、表現することに対しての懸念を抱きやすい傾向にある。

しかし、そんな時期にある中学生だからこそできる表現や、表現されている内容の深い鑑賞が叶うと考えて行った実践である。本題材を制作する過程の中で指導者が行った工夫は、制作者である生徒自身にしかない相手との共通の時間や経験、作者やその相手ならではの趣向を加えることで、人と違うからこそ生まれる表現の魅力を感じ、表現することへの安心感を持たせたことである。

８．成果と課題

表現する上での主題に自ら設定した相手への意識が確実なものとして存在していると、「こんなことをしてみたら面白い表現になるんじゃないか？」という考えを持つようになるなど、技能的側面に偏らない発展的思考の芽生えにつながった。

また、その思考の持ち方は生徒自身の表現に対する自信にもつながっていた。加えて、生徒たちそれぞれのアイディアについて話し合う時間を制作の途中段階に取り入れたことは、新たなアイディアの創出につながるだけでなく、個人の考えを友人が賛同してくれることにより、表現するにあたっての後押しともなっていた。お互いの考えを聞き合える活動を経た後の生徒たちは安心感から、より制作に力が入ったように見取ることができた。

一方で、成果と紙一重といえる課題もある。自分なりの思い入れある相手の存在を意識することで、表現の方法を見出すことを困難とする生徒もいた。

例えば、生徒たちの相手意識が予想以上の緊張感を生んだことで失敗を恐れてしまう場合や、自分のものにならないならばどんなものでも構わないといった考えを持つ場合である。該当する生徒たちは、比較的学習能力が高い傾向にあり、正解を導き出すことを得意とする生徒が多かった。美術科の学習活動においては、日頃から表現することへの抵抗は低く、どんな課題も難なくこなしていた生徒でもあった。

しかし、本題材のように、表現するにあたってのきっかけとなる相手への思い入れがあるからこそ表現が広がる面と、その表現に結びつけることを困難とする面との二極化が見られた。木材が変容していく視覚的なもの以上に、相手を意識するからこそ自由に発想することに苦戦している姿が見られた。

相手意識を強く持った作品制作の中で、生徒たち個々の発想をいかに引き出しながらも身心ともに支援していくことも、生徒自身に多くの課題を委ねた自由度の高い題材では必要な課題である。